

---

## ～ 神の領域 ～

龍馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

～ 神の領域 ～

### 【Nコード】

N6848A

### 【作者名】

龍馬

### 【あらすじ】

現代では想像も出来ない程科学が進歩した2XXX年。生活は豊かになり、医療も発達し……はた目から見ればそれは楽園だった。しかし、そんな世界にレジスタンスと名乗る謎の組織が混乱と破壊を巻き起こす。そして、レジスタンスとの争いに、ある一人の少年が巻き込まれて行く。

## 0 プロローグ（前書き）

この小説……ジャンルを何にするか凄く迷いました。SFにするか  
その他にするか、まあ最終的にはファンタジーにしました（笑

## 0プロローグ

人工自然。

そんな矛盾した言葉が当たり前の様に使われる時代。  
平均寿命120歳。

こんな人間の限界を超えている事が普通である時代。

2XXX年。

それが僕達の生きる時代だ。

ピピピピッと不快なリズムが少年の眠る部屋に響き渡る。少年は不機嫌そうに、四角いカプセルの様な物の中でモゾモゾと動き、そしてカプセルの中から小型のスイッチの様な物を押した。すると不快なリズムは消え、部屋に静寂が訪れる。

「さて、もう一眠りしようかな……て、やっばい！今日は……」  
少年はガバッと勢い良く起き上がる。しかし、カプセルの頭上に頭をぶつけてしまい、少年はそのまま気を失ってしまった。

しかしそんな少年を再び“あの”不快な音響が襲う。ピピピピッと。  
ピ。

「助かったよ」

少年はカプセルの中からスイッチの付いた小さなリモコンの様な物を手にしながら呟いた。少年はそのリモコンに付いているもう一つのボタンを押した。

するとカプセルの天井が開き、少年は体を起こした。

「ああー今日は“エアスクーター”のテストだからな。絶対遅刻は出来ないよ……急がなきゃ」

少年は独り言を呟き、服を着替えた。制服の様な服に着替え終ると、少年は部屋の隅にある窓を開け、軽く見ても5mはありそうな高さだが、なんの躊躇も無くそこから飛び降りた。

「よっ、とう」

着地と同時に履いていた靴から白い煙が吹き上がり、靴の中で何かが回転する。それが少年の足にかかる負担を減らしたのだらう。窓から飛び降りた事を少年はさぞ当たり前の様に振る舞い、横に置いてあるスクーターの様な物に近付いた。

驚くべき事にそのスクーターはハンドルの部分に手を触れただけでエンジンがかかった。しかし、最も驚くべき事は、少年がそのスクーターに股がり、発進すると……なんとそのスクーターが宙に浮いたのだ。

しかし少年はそれすらも当たり前だと言わんばかりに、なんの反応も示さず、慣れた手付きで運転していく。

「ああゝ間に合うかなあ？」

少年は宙に浮くスクーターを駆りながら、右腕にはめている時計を見た。

少年は少し焦った表情を見せフウと、息を吐いた。そして次の瞬間、スクーターを思いっきり上に傾け、アフターバーナーで急上昇した。

そして少年は下を見る。

こんなに高くは飛んでいないが、自分の他にも空飛ぶスクーターや車が何台も行き来し、道路を囲む建物はどれも滑らかな曲線を描き、四角く何処か他を拒む様な造りと違い、優しさ醸し出す。

他にも空中に屋台みたいな物が沢山飛んでいて、ドライブスルー

の様に空飛ぶスクーターや車に乗る人達がそこから何かを買って行く。

少年にしてみれば、こんなものは当たり前だ。

少年は持っていた鞆から何かを取り出す。それはゴーグルの様な形をしている、と言うよりゴーグルだ。

「さて、じゃ飛ばすかな」

それをゆっくりと頭にまわし、ゴーグルをかけ……少年はアクセスを全開にした。

## 0 プロローグ（後書き）

前書きでジャンルを悩んだと書きましたが、実はプロット作りが一番大変でした……まあ矛盾を起こさないなんてのは当たり前ですが、この話はなるべく丁寧に作りたかったので、結構時間をかけました。

あと、僕はもう一つ小説を連載させて貰ってますが、あつちは非常に長い話になる予定で、更に話を良く考えていなかったなので、暫く此方を書いて、次の展開が思い付いたらもう一つのを更新するという風にやって行きます。

適当で申し訳ありませんが、もしよろしければこの話の最後までお付き合い下さい。

## 1 日常（前書き）

一応、主人公は涼です。設定は陰が薄い。です。



## 1 日常

ため息が一つ、二つ、三つ……いやもつとだろう。

ため息の出処は全体が銀色をしている巨大な建物の、正面にあるグラウンドと思われる所からである。

グラウンドでは大勢の生徒が集まっており、その生徒達の注目を浴びる何かが飛び回っていた。

飛び回る何かとは、あの少年も乗っていたエアスクーターという乗り物だ。今乗っている生徒は順調に指定されたコースを巡回している。

グルグルと同じ所を何度も行き来しながら、何かを待っているかの様に、エアスクーターを運転している少年がソワソワし始める。直後、少年は前方に壁がある事に気付き焦ってハンドルを思いっきりきってしまう。

その勢いで少年はエアスクーターから吹き飛び地面に叩き付けられてしまった。

「NO、26 不合格。また半年後に出直せ」

地面に叩き付けられて、倒れたままの少年に教員と思われる男が側に近寄り、無情に言い放つ。

倒れたまま少年はハアとため息をつく。

勢い良く叩き付けられた割に少年への被害が少ないのは、今少年が着ている服にあるらしい。パイロットスーツの様な体にフィットしたダサイ服で生徒全員が嫌っているが、これは一時的に肉体を強化、及び保護してくれるらしい。そのため危険の伴う事をする時は大人も子供も皆このタイトのような服を着込むのだ。

少年は立ち上がり、肩をガックリと落としながら歩き出した。皆

が集まっている場所……では無く、その先だ。皆から少し離れた所に数人の生徒がいる。彼等は皆同様にため息をついている。そこに合流した先程倒れた少年も同じようにため息をつく。もはやそこではため息のハーモニーが奏でられている。

「キャハハ、ここに来たって事は思えも落ちたのか」

ガツクリと肩を落としている少年に、先にいたタイツの様なスーツの首元のフアスナーを下げだらない格好をしている男が声をかけた。

「なんだよ、見て無かったのか」

「ああ、お前なんて興味ないね」

だらしなない格好の生徒は少年を挑発する。しかし少年は

「あれ、涼！<sup>リョウ</sup> なんでお前までここに」

華麗にスルーし、後ろの方でうつ向いてる少年に駆け寄った。

「お前エアスクーター得意だろ。まあ、それしか才能無いって方が正しいけど」

「最後の一文は余計だよ」

黒い髪にオシャレのつもりだろうか？額の少し上にゴーグルを付けた少年が気だるそうに答えた。

「キャハハ、涼はな“エアスペ”に捕まったんだ」

「エアスペ!？」

すると先程スルーされた少年が不快な笑い声を上げながら、二人の方に寄ってきた。

「本当かよ。何したんだ？」

「うん……規定高度を大幅に上回っちゃって……」

「またそれが……」

「キヤハハ、こりねえ奴だな。まあ俺はインテリジェンス振り撒く奴より、お前みたいなのが好きだぜ」

慰めのつもりだろうか？笑いながらゴーグルを付けた少年、涼の肩をバンバンと叩く。

「ま、まあ僕はエアスクーターの免許はもう持ってるから今回のテストは別に良いんだけど……それより」

「キヤハハ、そうだ忘れてねえよな。“あの事”」

「う、いや…僕はテストに参加出来なかったんだし。外れた事にしよ」

“あの事”という言葉に涼は過敏に反応する。その反応を見ては少年は不気味に笑いまくる。

「あ、僕バイトクビになっちゃって……だから」

「ああ…言い訳か？」

ハヤト  
「隼人、勘弁してやれよ」

不気味な笑い声を上げる少年に、倒れた少年が言う。

「なんだよ、じゃあお前が涼の分も払えよ」

「い、いやそれは……」

少年は涼を助けようとしたが、隼人に言われ口籠る。

「ま、待ってよ。まだ僕が負けたわけじゃない」

涼のその発言に二人とも全く別の反応を示す。

「キヤハハハハ、エアスクーターしか取り柄の無いお前が言う台詞じゃねえな」

「だからそれは余計だって。僕はエアスクーターのメンテも得意だよ」

懸命に反論したつもりなのだろう。しかし、それは隼人の笑いという炎に油を足しただけに過ぎなかった。隼人はますます笑い出す。

「ギャハハハ、聞いたか流<sup>ナガレ</sup>今の」

流石にここまで言われると温厚な涼も少しはムツとなる。しかし、実際自分が言った事は笑われるような事だったと気付いた。流も涼に加勢してやりたいが、何を言えば良いのか分からなかった。いや、きつと隼人には口では勝てないだろう……そう悟った。

「まあいいや、じゃあこれから

実技、五教科の平均を足した数が一番少ない奴が二人に一週間弁当をおごるって事で。キャハハ……じゃあな！」

隼人は高笑いを上げながらその場を去って行った。

「ま、まあ頑張れよ涼」

流は涼には頑張つて欲しいが、自分も負けたくは無かったので非常に複雑な心境で、そそくさと涼から離れて行った。

一人残された涼は

「うん、まだ負けた訳じゃないんだ。家に帰ったら頑張ろう！」

そう心に強く決め、エアスクーターの試験も終わり皆が、銀色に染められたメタリックな校舎へと帰って行った。

数日後、ビリは涼に決まった。

## 1 日常（後書き）

なんかほのぼのしちゃってますが、結構重い話の予定です。  
次回から物語が動きます。

しかし、タイトルが悪かったのでしょうか……非常に読者が少ないです

## 2 襲撃（前書き）

随分間が空いてしまいましたが、更新しました。

## 2 襲撃

率直に言って僕は今、楽しい事ばかりじゃない。今だって二人に弁当をおごらなきゃいけないし、成績も悪くて補習だって受けなきゃならない。

でも、生活は豊かで、争いだって無い。歴史の勉強で昔の事を習ったけど、“あれ”よりかは絶対良い。

争いだって無い。僕がそう思えたのは……今日までだった。

キンコンカンコン。昔から変わらない音色が校内を響き渡る。その音と同時に生徒達の歓喜の声上がり、次々と同じ制服を着た生徒が教室から飛び出して来る。

この辺りは昔と変わらないな。と、昔を生きていた訳では無いが、涼は思った。

「不思議だね。あんなに早く飛び出して……そんなに授業で嫌かな？」

既に数人の生徒が飛び出した教室で、未だに額にゴーグルを付けている涼が、横の机で寝ている隼人に声をかけた。

「んあゝあ……そだな。まあ、嫌かな」

隼人はまだ眠そうに欠伸をし、そっけなく答える。そしてあの不快な笑い声を上げながら喋り出した。

「て言うより、俺から見れば全教科苦手な癖に、嫌いな教科が一つも無いお前の方が不思議だよ。ヒヤハハ、まあそこがお前の良いところかもな」

「でも、隼人は勉強出来るのに授業嫌いそうだね」

ピアスや指輪等のアクセサリーを付けたチャラチャラとした格好で制服をだらしく着ている隼人は一見落ちこぼれだが、顔は整っているし、勉強もスポーツも出来るいわゆる天才君だ。

しかし決してエリート面をせず、相手を皮肉ったり茶化したりするのは好きだが、思慮深い隼人に涼は何処かで尊敬の意を持っている。

「まあ、かつたるいからな……家でも出来るような事をわざわざ効率の落ちるやり方で強制されるんだから」

気だるそうにそう言い、隼人は鞆を持ち立ち上がった。

「とりあえず授業は終わりだ。ゲーセンでも行こうぜ」

「お金無いつて言ってるじゃない……バイトもクビになっちゃったし、今日は新しいバイト探すから忙しいんだ」

「ヒヤハハ、そうだったな。じゃあ……」

隼人は目線を横に移す。その先には

未だに机に備わっているパソコンに、ブラックボードに映っている文字を写しとっている流の姿があった。

流は勉強が出来ない。何事にも一生懸命なのだが、なかなか努力が実らないタイプなのだ。しかし流には特技がある。野球だ、野球をやらせればこの学校で流に敵うものはいない。

「あいつも無理か。ヒヤハハ、馬鹿ばっかだなあ俺の周りには」  
「悪かったね」



涼は全く悪びれていない謝罪をする。まあ、悪い事をしたわけは無いのだから当然だが……

「じゃあ帰えるわ」

ゾロゾロと他の生徒達が帰る中に、隼人も混じる。

隼人が教室を出てから十分程達、教室には数人の生徒と涼と流しかいなくなっていた。

「やっと終わった！」

「じゃあ僕らも」

やっと流が作業を終了したので二人も帰ろうとした、その時

学校にドォーンという爆音、そして悲鳴、最後にドタドタドタという足音が鳴り響く。

「手を挙げろお！」

直後、教室の扉が爆発で吹き飛び外から武装をした男達が乱入してくるなりいきなり叫んだ。

スクールジャックだ。

涼も流もいきなりの事に困惑しながらも、言われた通りとりあえず手を頭上に挙げ膝を付き地面に伏せた。

「いいか、大人しくしていれば命は取らない。だが一人でも抵抗すれば……この場にいる全員を殺す！」

武装した男の一人、顔はマスクで見えないが服の上からでも分かる長身で体格のいい男が叫び、教室にいる全員を恐怖に陥れる。

教室にいる生徒達は恐怖のあまり声が出ず、足腰が震え力が入ら

ずその場に倒れ込んでいる。

ああ……なんだろう。これ……僕は昔からよく学校に敵が攻めて来てクラスメートが何人が殺されて残りは僕と好きな子だけになって何故か僕“だけ”強くて敵をやっつけて好きな子は僕に恋をする。て妄想をしてる痛い少年だ。現在進行系で今でもつまらない講義の時や暇な時はこんな妄想をしている。

で、今……僕がいつもしている妄想と同じ展開じゃないか、好きな子はいないけど、コイツらをやっつけてヒーローになってやる！！

涼は頭の中で必死に考え、体を動かそうとした、しかし、震えが止まらず動く事が出来ない。

「ああ、情けないな僕」

「なにか言ったか！」

男達の一人が涼の独り言に気付き銃を向け叫んだ。

男が向けた銃は、ハンドガンのように小さく強襲には不向きな物だが、何故か銃口が三つあり、そして非常に三つとも銃口が小さい。

「い、いえ何も……」

銃を向けられ歯がガチガチ震えながら涼は答えた。

「そろそろ始まるな」

一人の男が呟いた。

「お前達ガキ共にも見せてやるか」

意味深にそう言つと、教室に備えられたブラックボードの横にあるボタンを慣れた手付きで操作する。するとブラックボードはテレ

ビへと変貌した。

「まあ、ありがちな手段だが分かり易いだろう」

男達以外はその言葉の意味はまだ分からない。

「そろそろだ……」

マスク越しに相手の笑みが見える。男達が付けたテレビからはこの時間にやっている連続ドラマが流れている。と、ここでいきなりデジタル放送の番組にノイズが走り、先程までやっていたドラマとは全く別の映像が写し出された。

テレビに写ったのは少々小柄な兵士と、それとは対照的に大柄な男だった。

コイツラのせいでこれから僕は……いや僕達は先の見えない道を止まる事なくつっぱしらなきゃならなくなっただ。チクショウめ……でもチョットだけ良い思いも出来ちゃったり……

## 2 襲撃（後書き）

感想、意見、質問お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6848a/>

---

～ 神の領域 ～

2010年10月9日20時18分発行